

イエス様の怒り

司祭 イサク 坪井 智



怒りっぽいチャプレン

しよっちゅう生徒たちから、先生は怒りっぽい、すぐ切れる、いつも怒った口調だ、と言われてしまいます。そう言えば、学校のチャプレンを長く勤めると、どうも「怒りっぽいくなる」ように思えます。昔牧師様をあまり異動させなかった頃、一つの学校に長い間チャプレンとして働かれる聖職がおられました。かつて、大阪のプール学院中学校・高等学校には、松山司祭という長年チャプレンをつとめられた先生がおられました。教区の若者にとっては、司祭様・牧師様というより、厳しく怖い「学校の先生」で、

を荒げて怒ってしまいました。後から年配の先生に、「チャプレンとしてあの物言いは…」とお説教を頂きました。その先生にとっては「聖職者かくありき」という思いがあり、私の言動があまりにかけ離れていたからかもしれない。それ以来、ラウンドカラーをしている時は注意するようになりました。



聖書の授業風景

怒りつつ泣く

一方、教師は、しっかりと怒ることができないと指導できない面があり、必然的に怒りっぽくなってしまうのかもしれない。でも怒ることは本当はしんどいものなのです。単に自分のむしゃくしゃした気持ちから怒るのであれば、怒って終わりますが、それは教育

でなく憂さ晴らしに他なりません。生徒のことを色々と考えるとき、怒りという形で表現せざるおえない場合があります。だから、多くの場合怒りつつ心の中では泣いています。また教師の怒りの多くは、対生徒への愛から始まっているのです。だから怒りつつも生徒に愛している心を受け入れてもらえよう祈っています。

いつも怒った後、怒った思いが相手に分かってもらえないか悩んでしまいます。教育の場では、愛に根ざしている怒りしか認められないと思います。人間関係の希薄さが真剣に怒ることを困難にしているようです。また私たちも、焦りから待てなくなり、余裕のない気持ちですが、怒りに違う側面を与えたり、つい手を挙げたくなる気持ちにまでさせてしまいます。愛に根ざした怒りの実践は、本当に難しくなかなかにできないものようです。

イエス様の怒り

イエス様が怒る有名なシーンは、エルサレムの神殿で商売人を追い出す場面です。この過激な行動は、神殿祭儀を否定する預言者

的な行為、祭儀中心の神殿の存在理由を全面的に否定する象徴的な宣言、などと解釈されたりします。でも単純な私は、「イエス様であっても怒られるんや」と怒られた事に心が向いてしまいます。人間的な面を見せてくれたことで、イエス様への親近感がわくお話です。本来神殿礼拝では、犠牲の動物やユダヤのお金が必要でした。だから、商売する人に神様への礼拝を大切にしたい、礼拝をささげる者への愛があれば問題がなかったはず。そうでなく、

神様を利用して自分の利益を求めたり、正しく指導せず袖の下を求めていた祭司たちにイエス様は憤りを感じました。イエス様の心の中には、何でこんな事をするのかという悲しい気持ちがある。渦巻いていただろうと思えます。この気持ちは最終的に十字架での受難に結びつき、至らない私たちをなとも愛し続けていることを示されました。イエス様の怒りが、深い愛から発したものと考えると、私たちも再度怒りの感情をイエス様に習うものとして見つめなおしたいものです。

(松蔭中学校・高等学校チャプレン)